

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 陳 萱

陳萱氏の「明治日本と台湾像の形成—明治七年「台湾事件」の波紋」は、明治5年（1872）12月、荒天により台湾南部東海岸に漂着した琉球船乗組員六十六名のうち五十四名が、現地人により殺害されるという出来事を発端に、明治7年5月、日本政府が台湾に出兵し、12月に撤兵するまでの経緯を「台湾事件」として捉え、この事件をきっかけに日本人が形成するにいたった台湾観、台湾イメージを、多くの資料を博搜して実証的に論じた労作である。

日本政府にとって「台湾事件」は、琉球船乗組員を殺害した現地人への報復行為というレベルにとどまらず、琉球の帰属問題、対清認識、台湾東部に対する領土的野心、植民地獲得と経営の可能性の認識、そして文明国としての責務の自覚、といったきわめて広範な問題に波及することがらであった。それは、近代化に邁進する明治国家の自己認識という、より大きな文脈にも関わっていた。陳氏は、こうした点を十分に認識しつつ、論述の対象を日本人の台湾認識という問題に絞って、きわめて広範な角度から検討を加えている。

本論文は、四部に分かれる。以下、論文の構成にしたがって内容の概略を記す。

第一部は「台湾事件」の概略、すなわち事件の発端、出兵計画の具体化と実行、対清交渉と撤兵までの経過を簡略に記す。日本政府は、当初琉球船の遭難にそれほど大きな関心を寄せていなかったが、後の台湾総督樺山資紀をはじめとする鹿児島県士族の働きかけや、駐日米国公使デ・ロング、及びデ・ロングの推薦をうけた米人ル・ジャンドルの献策などにより、次第に出兵の可能性を探りはじめる。日本政府内には出兵に慎重な意見も根強く、ヨーロッパ列強の圧力もあったが、台湾東部を「無主の地」する認識のもと、出兵は強行され、日本政府は事態への事後的対応を迫られる。ただし「蕃地」攻略ののち兵力の駐留に困難を覚えた日本政府は、駐清英国公使ウェードの調停もあって、清国から賠償金を得た上で撤兵するのである。ここでの記述は、多くの先行研究及び歴史記述に依拠するが、第二部以下の叙述についての予備知識を提供するものとなっている。

第二部は、政府及び軍関係者の公式文書・記録等を取りあげ、そこに表れた台湾観を紹介する。具体的には、外務省出仕となったル・ジャンドルの六つの覚書・意見書、清国との外交交渉にあたった副島種臣について記す『副島大使適清概略』、後に初代台湾民政長官となる水野遵（当時海軍省通弁）の『台湾地誌草稿』と「台湾征蕃記」、樺山資紀の『台湾記事』、軍医落合泰蔵の『明治七年征蕃討伐回顧録』、全権辨理大使として対清交渉にあたった大久保利通について記す『使清辨理始末』、蕃地事務局編纂の『処蕃趣旨書』等に各一章をあてて、各文書の性格と、それらのうちに立ち現れてくる台湾イメージを紹介

する。この第二部においては、まずル・ジャンドルによって、台湾東部が国際法上清国の領有権の及ばない「未開の地」として提示され、清国によって「化外ノ民」とされる現地人たちに「生蕃」の用語が用いられはじめることが指摘される。日本政府関係者たちは、台湾東部に関する「蕃地」「化外ノ地」といったイメージを受け入れ、さらに「無主ノ地」という一歩踏み込んだ認識を持つようになり、やがて植民地として領有されるべき対象と見なすようになるのである。また、現地人については、漢族の文明になずんだ「熟蕃」と区別される「生蕃」の野蛮さが強調され、気候風土については「瘴癘」の地としてのイメージが広められもした。

第三部は、当時ようやく発達しはじめていた新聞メディア、および出版メディアに表れる台湾観を跡づける。「台湾事件」に関する新聞報道は、政府による情報統制もあって、当初は十分なものとは言い難かった。政府は「太政官達書」「蕃地事務局録事」等を通じて事件の概要を公表してはいたが、情報は不十分で国民の不満が高まった。人々はわずかに外字新聞の翻訳記事を通じて、渴を癒すほかなかったのである。そうしたなか、日本最初の従軍記者となった岸田吟香の活躍は特筆すべきものがあった。吟香が記事を寄せた『東京日日新聞』は、そのために発行部数を飛躍的に伸ばしたほどである。台湾での体験を「台湾信報」「台湾手藁」に連載した吟香は、ジャーナリズムを通じての日本人の台湾観の形成に多大な影響を及したのである。吟香はさらに、18世紀のイエズス会フランス人宣教師ド・マイヤの記録を英訳した *The Early History of Formosa* を重訳し「台湾誌」として『東京日日新聞』に連載したが、同じ時期には島邨泰がメイヤースの *The Treaty Ports of China and Japan* を『台湾風土記』として訳出・出版していたし、当時上海で出版された著者不明 *Is Aboriginal Formosa a Part of the Chinese Empire?* が、立嘉度によって『蕃地所屬論』として出版されてもいた。これら新聞・出版メディアによって流通した台湾イメージには多様なものがあった。「生蕃」について食人、裸体、文身等々、その未開さを強調するような言説がみられ、多くの兵士が病に倒れる瘴癘の地としての気候風土が指摘される一方、野蛮とみなす現地人を日本の僻陬に住む人々の連想で理解しようとし、美しい島「フォルモサ」としての肥沃で物産の豊かな熱帯の土地を、植民地として経営する可能性が探られてもいた。また、台湾への漢族の定着が歴史的には比較的最近のことで、それ以前に日本人やオランダ人による植民の歴史があったことも確認される。

第四部は「台湾事件」を題材にして明治7年から8年にかけて出版された実録物『台湾軍記』『台湾戦争記』『台湾事略』『台湾戦争記』等にみられる台湾観を紹介する。ここでは、各作品に共通して取りあげられる鄭成功に関する言説、日本軍の攻撃対象となった牡丹社や、現地で拘束され東京に送られた爾乃少女についての描写が検討される。とくに鄭成功についての言説においては、日本人を母とする鄭成功が一時的に支配した台湾と日本の類縁性が強調され、爾乃少女をめぐる描写においては、台湾現地人を文明国日本が教化するという自覚が確認されるのである。

以上のように要約される陳萱氏の論文に対し、審査委員からは以下のような評価、批判

が寄せられた。

まず外交史、明治近代史において多くの研究が蓄積されている「台湾事件」について、日本人の台湾像の形成という面から新たな光をあて、資料を博搜した点が高く評価された。ジャーナリズムにおける報道を丹念に跡づけ、台北中央図書館所蔵の文献等、これまで日本国内の研究において看過されてきた資料を発掘し、不明とされていた岸田吟香の「台湾誌」の原本を確定するなど、調査対象は広い範囲に及んでいる。本論文は「台湾事件」を契機とする日本人の台湾像形成というテーマに関して、今後しばらくは基本文献としての地位を失うことはないであろう。ただし、この時形成された台湾像が、1895年の日本による台湾領有以後の植民地統治にどのような影響を及ぼしたのかという点に関する考察は、今後の大きな課題となるであろう。

一方、難点としては、論文の叙述が資料ごとに行われているため、指摘される台湾像、台湾イメージに繰り返しの多いことがまず挙げられた。また、日本側の資料の充実に比して、清国側の資料の検討が不足している点は問題とされなくてはなるまい。さらに、論文の構成上難のある第一部の叙述は序論に含め、本文における先行研究への言及を更に明確にすべきであるとの指摘もなされた。

個々の叙述、史料の読み方への疑問・疑義も、審査員から提出された。現地人の野蛮性の強調と日本の国威発揚の関連性、現地人についてのイメージと古来中国にあった南方についてのステレオタイプとの関係等々に関し種々議論があった。また、漢文の引用に対する訳文の必要性、文献表、図版の不備について指摘があった。ただし、これらは小さな瑕疵というべきものであって、陳氏の挙げ得た功績を本質的に損なうものではない。

したがって、本審査委員会は、ここに陳萱氏に対し博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定することに、全員一致で合意した。